

ザビエルは「はこ」に入るか

- 茨木市立キリシタン遺物史料館企画展の体験展示について -

桑野 梓

1. 館の紹介

茨木市立キリシタン遺物史料館は、茨木市千提寺・下音羽で発見されたキリシタン遺物について解説、展示するために、昭和62年(1987年)に開館した施設である。展示施設としては109.427平方メートルと小さい平屋建ての施設で、外観は教会を思わせる雰囲気を持つ。

最初のキリシタン遺物が発見されておよそ100年が経ち、茨木のキリシタン遺物やキリシタンの歴史について、様々な角度から研究が進められている。キリシタン遺物史料館ではこれらの先行研究を踏まえながら、平成23年度(2011年度)から企画展を毎年開催し、考古、文献、美術工芸など様々な分野での展示を開催してきた。加えて、企画展に合わせて様々な関連イベントも実施してきた。令和4年度(2022年度)の第13回企画展「ザビエルのはこ - 隠しつづけたキリシタン遺物 -」(会期:令和5年(2023年)3月23日~5月22日)では、来館者にレプリカに触れてもらう体験展示を実施することになった。

2. 展示と体験展示の実施背景

本展示は、「はこ」に注目した展示である。キリシタン遺物は千提寺、下音羽の各家から発見され、まとめて箱に納められている場合がほとんどである。その箱は、各家が所有するキリシタン遺物の中で最も大きい遺物に合わせてサイズが作られており、いわゆるオーダーメイドである。キリシタン遺物に限らず、当時の箱は現在と違ってそのほとんどは既製品ではなく、画一的なサイズが存在したわけではない。それぞれの遺物が入っていた箱をみると、絶対にみつかったはずではないキリシタン遺物を隠していた、というものの、鍵が付いているわけでもなく、結ぶための紐を通す穴があるわけでもなく、特に嚴重な箱であるという印象は受けにくい。

茨木のキリシタン遺物で有名な「聖フランシスコ・ザビエル像」(現在は神戸市立博物館蔵)が入っていた箱は、特に「あけずの櫃」と呼んでいたとされる。サイズは82.0×10.5×10.5センチ

を測り、現状上面蓋と短辺の側面を失っており、保存状態としては良好とはいえない。聖フランシスコ・ザビエル像(以下、ザビエル像)が発見されたとき、同時に発見されたのは絵画類4点、彫刻類2点(うち1点は青銅製の筒に入れる)、金属類8点(これらは容器2点に分けて入れる)、腕の蓋1点、冊子1冊である。先にも述べたように、箱のサイズは各家が所有する遺物の内、最も大きな遺物に合うサイズであり、この場合、絵画のマリア十五玄義図が最も大きく、本紙のサイズは81.9×66.7センチである。

しかしながら、この「あけずの櫃」に入っていたとされる遺物の内、絵画類は大幅な修理を受けている。発見されて2か月後に撮影したと思われる『京都帝国大学文学部考古学報告』第7冊(以下、『報告』とする)に掲載されている写真と現状を比較すれば、掛幅装を額装に変更したり、周囲を切り取ったりなどして、サイズが大きく変わっていることがわかる。

筆者は本展示を企画する中で、遺物が本当に「あけずの櫃」から出てきたと明言してもよいのか、全て入るのか、疑問を持った。しかしながら実物を再度入れてみることは現状不可能である。また、箱と遺物を並べるだけの展示では、観覧者にイメージが付きにくい点も問題であった。そこで、実際に観覧者にレプリカを箱にしまってもらった体験展示を製作した。

3. 製作

まず、「あけずの櫃」は内寸を実物に合わせて、透明アクリルで製作した。これは箱内部での遺物の様子を見るためである。箱は現状上面蓋を失っているが、内部に残る溝の形状から、スライド式の蓋が付属していたと思われるため、これも製作した。中に入る遺物は、ザビエル像、マリア十五玄義図、天使讃仰図(洗礼)、殉教者像の絵画類4点については、『報告』掲載の写真を、現状のサイズ(本紙のサイズ)と比較して同様となるように拡大印刷をし、ターポリン生地にインクジェットで出力した(註1)。キリスト磔刑像は両腕

は外されて青銅製の筒に納められていたとの口伝があるため、ポリ塩化ビニルにて筒を同サイズで再現した。腕の蓋はサイズの近い既製品を用意した。キリシタン抄物と呼ばれる冊子は、現在所在不明であるが、昭和9年（1934年）に出版された複製品を参考に寸法を決め、『報告』内の写真を参照しながら厚みを勘案した。マリア彫像、金属類（メダイ）を入れていた容器2点については、3Dデータを製作し、同サイズのをPLA樹脂で出力した（註2）。

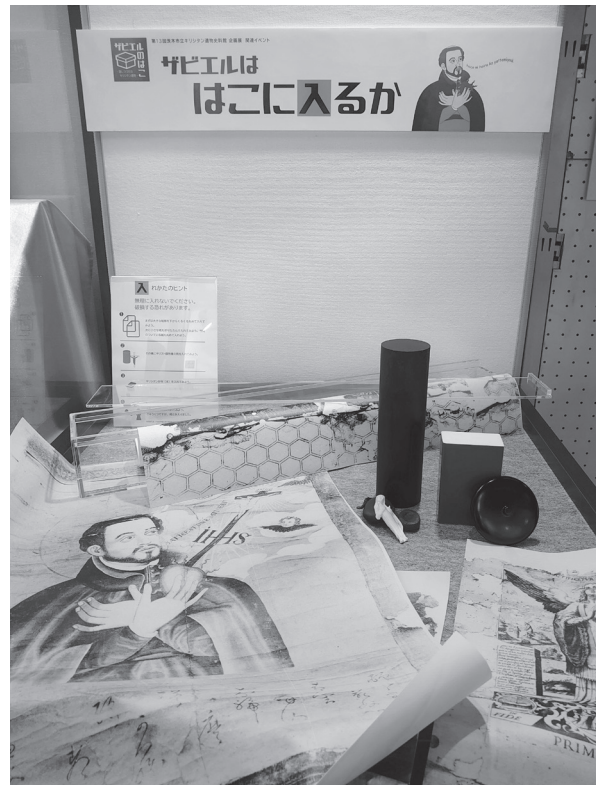
4. 所感、反省点等

本体験展示の結果から述べると、ほとんどの体験者がレプリカを箱に収納することができた。体験者によっては入れられない場合もあったが、軸物の絵画類の基本的な収納方法などを伝え、再度挑戦してもらって収納できた。また、空間的にも比較的余裕をもって収納できる場合が多かった。キリシタン遺物は、禁教期に「隠し続ける」という特殊な事情があったため、一般的な資料とは異なり、定期的、専門的な修理を受けていないことも特徴の一つである。例えば下音羽地区で発見された、現在は京都大学総合博物館所蔵のマリア十五玄義図は、裏に反古紙を何重にも重ねる、素人的な修理が施されていた。ザビエル像をはじめとする「あけずの櫃」内の絵画類は、今では当時の状態を知る手掛かりは正面から撮影した写真のみであるため、裏側は上記マリア十五玄義図のような修理が施されていた可能性もある。よって、この体験展示の正確性には不確実な部分が残る。しかしながら空間的に余裕のある収納ができたことと、遺物が押し込まれていたり正しい収納状況であったとは限らないことを鑑みると、収納は可能であったと言えそうである。

実際に入れてみることで「理解しやすく、迫力があつた」「イメージが具体的になり、よかった」などのお声をいただいた。この体験展示で、遺物が入っていた箱と、そこから出てきた遺物をただ陳列するだけでは得られない、キリシタンの歴史に関する様々なイメージの湧出があれば幸いである。

註

- 1) レプリカ作成に係る『報告』内の写真使用にあたっては、京都大学文学研究科考古学研究室吉井秀夫氏よりご許可を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。
- 2) 3Dデータの作成には正岡大実、川西宏実両氏（本市歴史文化財課）の手を借りた。また全てのレプリカは、株式会社日展の製作による。



体験展示設置状況



体験の様子